

## 三江紹益の法系とその周辺

加藤 正 俊

- 一 「三江和尚履歴記」
- 二 三江紹益と江岳元策
- 三 「笠山会要誌」と堅操元松
- 四 江岳の晩年とその法系の末路

### 一 三江和尚履歴記

建仁寺二百九十五世、高台寺開山三江紹益（二五七三—一六五〇）の伝は、受業の門人江岳元策著すところの「開山三江和尚履歴記」に見られる。三江紹益の開山である建仁寺塔頭久昌院には現在「洛東高台寺会要事迹」なる題簽のもとに、同上の会要事迹と「鷲峰山高台禪寺伽藍志」「開山三江和尚履歴記」の三部を合綴した江岳元策の自筆本が蔵され、その転写本が駒沢大学図書館にも一部架蔵される。自筆本は美濃判十丁よりなり、一丁二十四行の蜀紙に一行凡そ二十一字を収める。巻頭余白に「衣笠山延慶庵」という二行六字の白文印があることより察すれば、これはもと江岳元策の住庵たる洛西松尾、天竜寺派延慶庵（現在廃寺）の所属にかかると思われる。（延慶庵に

ついでには後述する。

伝によれば三江の出生は元龜三年十二月二日（一五七三）。洛北の産にして出自は奥村氏。天正五年、六才にして建仁寺塔頭常光院の明室宗杲の室に投じて儒釈の諸籍を習い、十五歳にして始めて祝髪受具したといわれる。しかし不幸にしてこれより二年後の天正十六年、三江は明室の急逝にあい院務を継ぐに至っている。三江十七歳の時のことである。ここで明室の法系を諸種の記録によってたどってみると、明室の師は常光院開山、温仲宗純（？一五一一）であり、温仲の師は春夫宗宿であり、春夫の師は無因宗因となる。<sup>(1)</sup>かくて三江は常光院の明室の室に投ずることによって、五山派に籍を置きながら山隣の開山派の法系につらなることになるのである。

温仲の創建にかかる常光院が、五山派の中に設けられた関山派の最初の塔頭であり、また建仁寺の中に関山派の塔頭の出来した所以は、建仁寺天潤庵が南浦紹明の直弟可翁宗然（大応派）の塔頭であり、この可翁に参じて出家した無因宗因が天潤庵の出身でありながら、後に転じて授翁宗弼に参じ妙心寺を継ぐに至ったそれ以来の建仁寺と関山派との縁由によるものであるといわれる。<sup>(2)</sup>

江岳元策自筆本の「履歴記」では、明室示寂の記事以後の野紙六行（凡そ百二十六字）分が切りとられており、直ちに天正十八年（三十九歳）建仁の諸師の推奨によって三江が秉弘の間禅者の役に充てられたという記事に続く。駒大本と対照してみると、自筆本ではこの間に左の如き記事を欠くこととなる。

自思惟、我承先師庇蔭、繼院務、雖然関山祖脈、至我既欲断絶、豈与彼無師承之人、数吾祖幾世者、同其孟浪哉、奮激已決、維時妙心円明国師（南化）旺化当時、直登玄室、一語契合、許就会裡、改号三江、

日夕親炙、国師密欲付心印、会裏齊輩、有致陷阻之情者、竊告国師曰、古来関山一派嗣法、非妙心掛搭之僧、不允付授、若旁出心印、非祖規之所定、必勿鑑証、国師笑且諭曰、爾不知哉、西天四七東土三三、江西湖南五家七宗、祖々相付機々相投、南浦翁遠涉溟渤、撞著天沢祖、自爾已往宗峰承后、吾祖次之如是転伝、只貴欲使祖燈盛大天下、未知川僧護川浙僧護浙、如爾所言、与夫井蛙蠃螻何異、況益首座所司塔院、温中祖者嗣法春夫、夫嗣無因、因嗣授翁、翁乃吾祖的子也、然則本寺之退藏与他山之常光、猶魯衛之邦豈以其人貳其道哉、若以叛祖規為言、実非通論、於我不取而已、因是言者輟退、終伝心印、国師無幾敍化、海山珠兄尚恐六群排々、而親写正伝図并国師贈投偈頌以附于師証師承之不案、後以国師遺命遷天童山祥雲寺、

これは三江紹益が明室の示寂後、建仁寺における関山派の法脈が明室一代にて絶えてしまふことをなげき、奮激して当時盛名のあつた妙心寺の南化玄興（一五三八—一六〇四）に通参し日夕親炙、遂に心印を受くるに至つた事情のべ、更には五山に籍を置く三江に関山派の法を許すことには、南化門下の中にも多大の反対があつたことを示すものであつて、三江の法系を考える場合頗る重要なことがらである。

南化玄興の語録である「虚白録」の末尾に、隣華院の柏嚴玄喬編するところの南化の行状が附せられているが、その中において柏嚴もこのことにふれ左の如く述べている。

所度弟子若干、其得法揚化者一十八人、東山常光院三江益亦其選也、受業師明室許公臨寂以院事付益、益以爲許公系出関山、今至我將断豈可安処乎、聞師道望直帰席下、密勿夙夜、一日入室機語相契、師与以印

前門下有議之者、白師曰、益本東山種艸未挂搭於法山、昧於乃祖風規、外間相傳言、師以衣法付授益事、似出於輕易、竊為師不取也、師諭曰、南浦翁截海遇天沢祖、以降唯要祖燈盛大耳、未聞川僧護川浙僧護浙、且常光温中純者春夫之的子而夫嗣無因、退藏与常光其猶魯衛之邦、以人貳道我不為也、爾勿復言、於是言者止矣、師帰寂之後海山珠兄尚恐六群排排、親写正伝図附益、益後出世南禪開祖高台、爾来的相承揭閩山一燈於東山者至今不絶、

前者が三江側の記録とすれば、後者は妙心寺、南化側の記録といふことができる。しかし両者の内容を仔細に点検してみれば、南化の行録の輯せられた宝暦という時点とも考えあわせ、この行録の記録も江岳元策の「履歴記」にもとづくものであると考へて誤らないであらう。

問題をもう一度元策自筆本の「履歴記」に移してみよう。自筆本を初見した時、前述の六行分の欠落はさして気になるものではなかった。明室示寂後二年にして建仁の乗弘の間禪者となり更に建仁の紀綱寮に入るといふ記事は、何の支障もなく前後の年譜につながるものであり、単に元策の書損によって切りとられたものと考えてよさそうであった。しかし駒大本「履歴記」と照合するに及んで事情は一変した。始めに考えられたのは、自筆本が延慶庵から建仁寺の久昌院の蔵に帰した時点で、三江が南化に参じ閩山一派の法系を嗣承したとする前記の記録が、五山派の建仁寺内において抵触するところとなり削除されたのではなからうかということであったが、これは余りにも小児病的な発想であった。<sup>(3)</sup>第一自筆本の欠落部分は百二十字余に該当するスペースに過ぎないのに、駒大本ではその間にその三倍に当る三百五十余字を当て、前記の記録を綴っているからである。疑問はしかし簡単に氷解した。自

筆本の最終丁に当る袋綴の袋の中に挿入されている元策自筆の紙片（前述の如く本文が二十四行の罫紙に書かれてあるのに比しこれは無罫の美濃判一葉）があり、その内容が駒大本に見られた三江の南化に参禅したという前記の記録そのものであったからである。想像を許るされるならば、元策は三江の「履歴記」を脱稿製本の後、何等かの理由から、特に三江の法系についての箇所の方に旧稿の三倍の内容をつぎこんで新規の文章を作り上げ、その上で旧稿の該当部分を切りとってしまったものと思われる。あるいは更にこれを草稿本として、もう一つ「履歴記」の浄書完本が作られたのではなからうか。久昌院本の随所に見られる旧稿塗抹のための墨のあとと、数ヶ所にわたり新に頭書された本文補充のための文章とがそのことを思わせる。従って駒大本ももう一つの浄書完本「履歴記」よりの転写ではなからうかと想像されるのである。

(1) 無著道忠著「正法山誌」第十卷（刊本二三五頁）では左の如き説も述べられている。万拙和尚云 春夫与温中之間年代久矣 蓋失二三世之名

(2) 「日本仏教史」第四号、玉村竹二氏論稿「初期妙心寺史の二三の疑点（下）」参照

(3) 伊藤東偵師著「黄竜遺韻」によると、三江紹益が高台寺に迎えられてより、常光院、久昌院はもとより一山脈である興雲庵、靈雲院、清住院、大鑑派である禅居庵等にも三江の一派が伸長するに及んで、山内は黄竜派、法灯派、三江派に三分されるようになり、寺院の標高に於いても他の二派を圧する勢力となったようである。

尚、無著道忠の「正法山誌」第十卷に左の如き記事をみる。

建仁寺塔頭、嗣法於南化、系妙心宗派者、九昌院（益長老、嗣法南化）、常光院、清住院、此三院南化派也、毎年妙心開山忌、発二一僧献二香資於開山塔一

これは現在も続いている儀礼であるが、南化の塔所である妙心寺の隣華院と建仁寺三江派との関係は更に緊密であった。隣

華院旧蔵の「無礙塔香資納下牒」(内題・瑞世転籍臨時炷拜無礙塔諸香資)は、安永八年から文化六年までの記録で、時代的にはやや下るが、安永八年正月廿日には常光院環中文諦西堂改衣につき、香資として南鐙香片を隣華院に納めている。寛政十年十月十七日には建仁の久昌院廉西堂入来し、当月二十二日の常光院中興・三江益和尚百五十年忌預修の爲、常光院より献鉢料を献納しているが、隣華院からも銀貳拾目を下行し、三江和尚遠忌の預修に饅頭貳百団を献納している。翌寛政十一年八月廿二日は、高台寺開山・三江和尚百五十年忌に正當し、隣華院では同じく銀參拾目を下行して、饅頭參百団を高台寺に納めている。

とにかく建仁寺の三江派と妙心寺との関係は、われ人ともに認める公々然たるものであった。

## 二 三江紹益と江岳元策

「履歴記」の著者江岳元策の伝は定かではないが「履歴記」の末尾に

元策曾侍巾瓶者十二年、前後教導、祇贖之慈、覆獄之成、不知所以報之万乙、師敎化之後、一錫入龜山：とあることより察すれば、江岳元策は三江紹益の晩年の十二年間を師に近侍して參禪問法につとめたようである。三江の示寂の年より逆算すれば、およそ寛永十六年(一六三九)前後、三江六十八歳の頃の出会いと思われる。(元策の年齢は不明である)。ついで三江遷化の後、錫を洛西靈龜山天竜寺に移すことになる。久昌院には「三江和尚語録」(写本)の外に、三江の詩文集である「驚峰一枝」(写本<sup>1)</sup>)を蔵する。美濃判八十三丁無野紙本で、これも元策の自筆と思われるが、同書の後書きは左記の通りである。

右三冊者友林老師和尚雪胸之著述也、雖然或記於路行破之、或書於船上失之、半亡矣、茲幸有胸塵集者、

寔雖九牛一毛蒼海一滴、都寫焉分縷糸為三冊、獻老師而求書題号、老師因名鷲峰一枝、則是世尊拈鷲嶺青蓮一枝笑設飲光、老師以鷲峰三冊笑求世人之謂乎、豈慶安二巳丑臘月日 元策謹書

右三冊

宗勤<sup>(3)</sup>

侍者 竜信 誌之

元策

即ちこの「鷲峰一枝」の成稿は慶安二年のことであり、三江の示寂の前年に当る。元策は侍者の一人として同書の編纂に加わり、且後書きを誌している。おそらく侍者の代表として最もあずかって力あったのではなからうか。一年後の慶安三年になると事情は少しく変るようである。禅文化研究所聴松堂文庫に左の如き三江自筆の書幅を蔵する。

我幻質終難寫

何人為施丹青

請看分身百億

桂輪依旧照櫺

汝是誰耶 咄 有知音策太痴

昨夜相逢休々地 今日分明叫

惺々

三江紹益の法系とその周辺（加藤）

龜山策藏主需贊 山野病中

涉筆無<sub>レ</sub>由 終不得<sub>レ</sub>止借侍者  
之手<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>其求云

三庚寅八月十八日

前南禪鷲峰遺老三江叟(花押)<sup>(4)</sup>

三庚寅は慶安三年のこと、八月十八日は三江示寂の四日前に当り「履歴記」中の左の記事に照応する。

八月十八日、病勢少瘳、裁本寺之遺誠隣旧之遺書、其夕出所貯資具悉散故旧并諸弟奴僕之儔、

即ち元策は八月十八日、師の三江の病状の少康の時を俟って頂相の贊を需め、三江もまた示寂の日の近きを予知し、病中無理をおしてその需めに応じたようである。<sup>(5)</sup>しかし前述した如く「履歴記」では「師敍化之後、一錫入龜山……」とあり、三江の示寂の後天竜寺へ移ったように思われるのであるが、この書幅では既に「龜山策藏主」とあり、天竜寺に在籍しているようにとれる。藏主位は乗弘のための問禪の禪客を勤めて、始めて侍者位より昇位できる筈のものである。龜山策藏主とある以上天竜寺の藏主位であって建仁寺の役位ではないであろう。元策は天竜寺在籍のまま三江に参じたのであろうか。

「履歴記」の中で元策は三江の嗣法者について次の如く記している。

凡經師之指揮開基中興者大小十二院、受師心印者六員、茂源、鈞天、三峰、韋天、泰室、心伝、<sup>(6)</sup>在師之会裡、乗弘者十有五員、



しかしこれは建仁に籍を置くものだけのことであろう。三江最晩の十二年をその下に参じ、詩文集「鷲峰一枝」を編し（三江語録の編者もおそらく元策であろう）その末期に臨んでは頂相の賛を許るされ、その寂後師の伝を著した元策も、当然三江の心印を受けた一人とみなされよう。「鷲峰一枝」の中に三江より道号を付与された弟子の名が列記されている。古岩玄暢 心伝正鉄 梅室竜信 桃悟宗勤（院曰靈雲）養屋宗育 如雪紹怡 韋天祖昶 三峰紹善 茂源紹柏 泰岳祖昶（但加州国泰東堂也 久随師遊学）周南紹叔 機伯紹活 德雲林盛（但加州長樂寺之僧 久入師室暮請朝参）と並んで江岳元策の名もあり三江の左の如き号領もみられる。

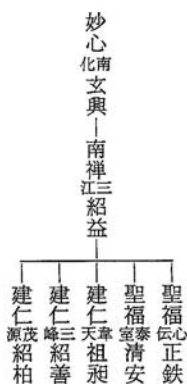
城北流幽水已清 陽楼大觀記茲明

雲深日暮作何所 入澗青松風有声

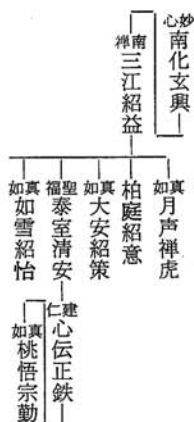
天竜寺に目を転じてみよう。慈濟院藏「支桑禪刹」をみると、江岳元策は天竜塔頭南芳院（現在廃寺）と前記の延慶庵の世代に列し臨川位（十刹の西堂位）<sup>(8)</sup>にのぼり碩学職に任ぜられている。衣笠山地藏院の世代は、その塔頭である延慶庵と竜濟軒よりの輪住とされる。<sup>(9)</sup>当然江岳元策は地藏院の世代にも加わることになる。

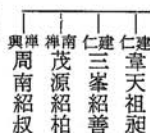
かくて南化玄興より三江紹益へと受けつがれた関山派の法系は、建仁寺を介して天竜寺へも分流したと見なしてよいであろう。三江紹益のたどったコースがそのまま江岳元策に再現される。江岳元策は天竜寺派延慶庵（又は地藏院）の伽藍法系を嗣ぎながら、三江紹益を通じて関山派の印証法系とつながるわけである。前章で述べた如く江岳元策が三江の「履歴記」を一旦書き上げ製本しておきながら、さらに推敲を加え長文を書き足してその法系を強調した所以は、この遍の事情によるものであらう。

- (1) 駒大新纂禪籍目録も、岩波の国書総目録も、日本仏教全書続刊予定書目によって「鷲峰一枝」の書名をあげているが、共にその所在を明らかにしていない。「三江和尚語録」と内容に亘っては重複するところも見られるが、全く別本である。
  - (2) 友林は三江の字、始め友竹と称した。
  - (3) 三冊とあるが、現在は合綴され一冊。侍者宗勳、竜信は三江より道号を付与された桃悟宗勳と梅室竜信であろう。
  - (4) 「禅文化」五十三号巻頭写真「室町桃山時代の墨蹟」参照
  - (5) 研究所蔵するところの三江の書幅は、頂相がなくその賛文だけである。
  - (6) 無著道忠の「正法山誌」(刊本二三五頁)では三江の法嗣を次の五人とする。「曰茂源紹柏長老 曰三峯紹善長老 曰韋天祖昶長老 曰泰室清安長老 曰心伝正鉄西堂」
- 万治版「正法山宗派図」も五人とする



「嘉永 正法山宗派図 東海派 重撰 上」になると次のように変化してくる。





(7) 南芳院寛永年中創建

開祖在中淹嗣法龍源住五鳩甲利正長元戊申十月七日寂二世天龍茂伯全森天祥中周瑞臨選才梵及天文盛周憲伊仲周任首座  
 古岸周藤弘瑚月周建弘臨江岳元策

(8) 延慶庵貞治年中建立

開祖碧潭周皎二世智旭峰妙朝天仙英周玉臨雲谷周芳覺九成周韶大賀周吉首座叔和梵康首座臨養仲周保濟叔周  
 弘首座臨堅操元松臨江岳元策任顯

(9) 衣笠山地藏院貞治年中細川頼之建立請碧潭和尚住之節請夢窓國師為開二世碧潭周皎勅諭宗鏡神嗣法夢窓応安七甲寅正月三日金笑山周  
 念智旭峰妙朝天仙英周玉臨雲谷周芳覺九成周韶大賀周吉首座叔和梵康首座爾後自延慶龍濟輪住

三 「笠山会要誌」と堅操元松

建仁寺常光院と関山派との関係は先きに考察した通りであり、師匠明室の急逝にあい三江が建仁寺に在籍のまま妙心寺の南化玄興に参じ、遂に関山派の印証を受けるに至った経緯も述べてきた。三江には関山派の法系を嗣ぐべき理由があり、寧ろそのことが三江に課せられた歴史的な使命であったとしてよいであろう。

関山派の印証法系を嗣いだ江岳元策と天竜寺派との関係は如何であつたらうか。南芳院と江岳元策とのつながり

は、南芳院の記録が皆無のため判然としないが、地藏院には江岳元策の編著になる自筆の「笠山会要誌」<sup>(1)</sup>が遺されているので、これを手がかりに考察してみよう。「笠山会要誌」の内容は、久昌院蔵の「洛東高台寺会要事迹」と全く軌を一つにしており、「京城西丘葛野郡衣笠山地蔵院志附会要録」という内題が示す通り、それは地藏院の地理的環境から諸伽藍の歴史、地藏院の古記録を始とし、事実上の開山である碧潭周皎、開基細川頼之の記録、及び地藏院の各世代の伝記を加える。美濃判四十丁、一丁二十四行の罫紙に書かれており、丙申冬十月中澣という年記のある虎林中虔の跋文が附されていることより、その作製の年代を明暦二年（一六五六）頃とすることができると同書その他の地藏院記録によると同院の世代は左の通りである。

第一祖 正覚国師（註・夢窓国師・勸請開山）

第二祖 宗鏡禅師（註・碧潭周皎）（延慶開祖）

第三世 旭峰妙朝禅師（延慶二世）

第四世 仙英周玉禅師（延慶三世）（竜济開祖）

第五世 雲谷周芳禅師（延慶四世）（竜济二世）

第六世 九成周韶禅師（延慶五世）（竜济三世）

第七世 太賀周吉首座（延慶六世）（竜济四世）

第八世 叔和梵康首座（延慶七世）（竜济五世）

第九世 養仲周保禅師（延慶八世）

第十世 濟叔周弘首座（延慶九世）

第十一世 堅操元松禪師

第十二世 江岳元策禪師

第十三世 絕岸元箴藏主<sup>(3)</sup>

一見してわかることは、第十一世の堅操元松から諱の系字が周から元へ替ることで、十世と十一世の間に法系の断絶が考えられることである。因に「笠山会要誌」によって十世濟叔周弘と十一世堅操元松の伝をみてみよう。

濟叔周弘は幼にして出家し、竜濟軒六世琛甫周璘の弟子の西齊等琦と共に地蔵院九世養仲周保に侍巾すること多年、後延慶より地蔵院に輪住するに至っている。天正十三年（一五八五）の京師の大地震に遭い、地蔵院の堂舎倒壊して後修造信施の人なきままに、竜濟軒の西齊等琦と相議し本院の旧器、師檀の靈牌等を両院に分賦して他日再興の日を期したのであるが、しかし再造の檀信なきまま世寿を終り、更にその業を継ぐべき嗣子にも恵まれず延慶の法系もここに断絶することになった。この後延慶庵、地蔵院共に無住の時代が続く。（天正大地震より三十年後に當る慶長の末年には、天竜塔頭松岩寺の舜岳玄光が延慶の院務を仮看していた記録はある。）

堅操元松は天正十一年（一五八三）若狭に生れた。父は松宮伊賀守、長ずるに及んで南禅語心院の梅印元冲の下に投じて受具入業、元松の諱もこの時つけられたものであらう。師の撫愛最もすぐれ、侍香、維那等の諸職を経たが、元松二十三歳の時（慶長十年、一六〇五）不幸にして師の梅印元冲の遷化にあい、その遺命によって大梅山長福寺の塔頭牧雲、藏竜の二院の知務を兼ねることになる。慶長十五年南禅の崇伝、家康に召されて駿府の金地院に移るや、

崇伝の命によって元松もその駕に従い駿府に移り、僧録の帷幄に参じ納所の実務に携わるのである。本光国師日記に頻出する松首座その人が即ち堅操元松に当る。寛永十年（一六三三）崇伝は示寂に先き立ち元松に大略次の如く遺命する。

「京師地藏院が震災に倒れて以来荒蕪既に久しい。延慶の檀越の宰相の局、松径尼にその復興を依頼され、且亦自分も再造の志を抱いていたが、東漂西泊そのことを果さぬ中に大期既に迫る。願くは松公そのことを図れ」と。堅操元松はこの遺囑により、洛に入り天竜に掛搭し延慶を看護し地藏院の再興をはかるのである。時の天竜住持玄英<sup>(玄)</sup>寿洪は、堅操元松は南禅の前堂であり説法耆旧の人である、どうして暫到客位の僧の待遇ですますことができようか、と敦請して第一座に充て鈞割を継受して臨川位（十刹の西堂位）にすすめた。

さて既述の如く堅操元松は崇伝の命を蒙って東西（駿府、後に江戸の金地院と南禅の金地院）に勤勞すること殆ど三十年に及んだ。その間三江紹益、悦叔宗最（南禅二六九世）英岳景洪（南禅二七二世）規伯玄方等の諸先達に参扣し、孜孜として請益したのであるが、しかし未だ快樂の地を得なかった。三江は関山派であり、英岳等は五山派であり、規伯は景輶玄蘇の弟子で、幻住派に属する。<sup>(4)</sup> 堅操は當時を代表する各派の禅僧に歴参しながら休歇の境に至らなかつた。後、江戸に開心居士なる者があって、牛過窓櫺の話に参じて翻然所知を忘じたということを開き、書を呈して禅要を尋ねた。開心居士は書に托して次のように述べている。

只向信得及处自透脱矣、故方退歩頓脱、無所不至也、故拈仏祖旧公案、悉皆約下矣、所以靈山密付 少林单伝 流伝令付囑云々

居士は大徳寺二五〇世にして塔頭金竜院開山である伝叟紹印の弟子であり、此道を護惜すること宗師家よりも厳であった。堅操元松はこの聞心居士に参じて心印を受けたとされる。江岳元策の記すところによれば、堅操は参請する者あらば次の如く述べたといわれる。

著衣喫飯、放尿屙屎、奚其不作如寒之工夫、下語着語是什麼參禪耶、人命有呼吸、空過一生勿墮時類、口授指教之禪、行巻抄録之禪、寂黙沈枯之禪、放逸空濶之禪、閻羅王前無汝開口之分耳、

堅操元松の禪（聞心居士↓堅操）は下語著語、口授指教、行巻抄録の禪を排除するものであり、著衣喫飯只日常底に於いて如寒の工夫をせよと強調している。先きに聞心居士が「牛過窓櫺」の話に参じて所知を忘れたことを述べたが、堅操元松も接化の手段として常に「牛過窓櫺」の話のみを提撕していたようである。<sup>(5)</sup>これは室町時代末より桃山、江戸初期にかけて一世を風靡したといわれる口訣伝授的な禪風と、大いに異なるものである。<sup>(6)</sup>

しかし聞心居士の師は竜宝門下金竜院の伝叟であり、伝叟の法系は督宗紹薫につらなり、徹岫宗九、東溪宗牧とさかのぼる。<sup>(7)</sup>「正法山誌」第八卷（刊本一九三頁—一九六頁）には、大徳寺南派中の督宗派、特に伝叟を開山とする金竜門派の密参、行巻について詳述する。それらはまことに下語著語、行巻抄録の禪の典型と思われるものである。おそらく聞心居士も、このような金竜院一派の口訣伝授に密参した筈である。にもかかわらず、在俗とはいえ、聞心居士のように下語著語、行巻抄録を排する禪風の出てきたことは注目に価することであろう。堅操元松は五山の中にあつてまさにこのような宗統の流れを汲む人であつた上に、かつては崇伝の下にあつて経営の実力を發揮し、今やその遺命によつて地藏院の廃絶を興さんとしており、且当時の僧録最岳元良とも甲子を同じくし、六十年に及ぶ

交遊も重ねており、かなり自由な立場にあった人と思われる。このような堅操の弟子として元策は成長し、<sup>(9)</sup>そして師の堅操の旧知でもあり、且当時五岳の位頭として声望のあった三江への参禅が始まるものと思われる。剩え天竜寺では既に策彦周良（二五〇一—一五七九）の弟子、済蔭玄宏、三章玄彰を始めとする妙智院、梅真玄湜、玄英玄洪の真乘院、舜岳玄光、知堂玄覺の松岩寺、惟清玄廉の西芳寺、為霖玄佐、賢溪玄倫、虎峇玄竹の鹿王院等が幻住派の密参の洗礼をうけていた。<sup>10)</sup> 関山派の三江に元策が参ずることにさして支障も生じなかった所以であろうか。

但し問題は残る。かつて堅操は三江に参じて快樂の地を得なかったのに、弟子の元策は三江に参じてその心印を得、堅操のあとを襲って地藏院を嗣ぐ。三江の弟子の鈞天永洪は「祭三江和尚文」に

几上行卷。咳唾在耳。壁間偈頌手沢猶遺

と述べているが、三江の禅も堅操の極力排した行巻抄録の禅であったようである。「履歴記」によると、建仁寺では当時僧家の常である展鉢の儀、結跏の式すら未知の者が多かったが、三江による南化派の流入によって入室勘弁垂示代語はば叢規の古風に復し、諸方亦多くこれに效ったというが、矢張り口訣伝授を旨とし密参をこととするものであったであろう。与えられた紙数はようやく尽きようとしている。堅操と江岳の禅容の相違とその結びつきは、向後の問題として提示するにとどめ、残された記録を摘記して江岳の晩年と、堅操、江岳と続く法系の末路をたどろう。

- (1) 「会要雜誌隨筆」等後人の手によって追録増補された分も含む。
- (2) 天竜二〇二世、塔頭慈濟院九世、「虎林和尚語錄」（写本）あり。



- (3) 「支桑禪利」では前記の如く二祖の次に三世として、天竜寺真乘院開山笑山周念（細川和氏の子、頼之の猶子）を加える。
- (4) 幻住派については「史学雜誌」五九編第七、八号所収玉村竹二氏論稿「日本中世禪林に於ける臨濟曹洞兩宗の異同―林下の問題について―」と「円覺寺史」中の「幻住派の導入と法系の大變動」の項参照。

(5) 堅操に対する江岳の贊文に

擎毒拳於龍阜一噴殺氣於龜峰

銅頭鉄額 嘻々囉々

是凡是聖 思議孰容

當陽若是 向什麼宗

窓櫺一過 巴鼻無蹤

とあり、堅操の画像を祖堂に安する時の奠文に「佗年提牛窓櫺之話」とある。

- (6) 口訣伝授的な禪風の發生についても、前記の「日本中世禪林に於ける臨濟曹洞兩宗の異同―林下の問題について」を参照
- (7) 大德<sup>七十七</sup>世東溪宗牧—大德<sup>九十</sup>世悅溪宗慈—大德<sup>八十</sup>世小溪紹愆—大德<sup>九十</sup>世徹岫宗九—大德<sup>九十</sup>世清庵宗胃

「大德<sup>百</sup>世督宗紹童—大德<sup>百廿</sup>世太素宗謁—大德<sup>百五</sup>世伝叟紹印—大德<sup>百八</sup>世禪海宗俊—大德<sup>百九</sup>世千巖宗諱（昭和九年十二月刊「増補正燈世譜」による）」

- (8) 下語著語、行巻抄録の實際の内容については、鈴木大拙全集第一巻「日本における公案禪の伝統」同四巻「日本禪思想史の一断面」に委しい記載がある。

- (9) 「笠山会要誌」は江岳元策の編著であつて、堅操元松までの伝は判明するが、堅操と江岳のつながりは明かでない。先きにも引用した堅操の画像を祖堂に安する奠文に

延慶丈室元策 早奉湯藥 久承醫款とある。

「三江和尚履歴記」の内容の如く、三江の死後（慶安三年（一六五〇））江岳が始めて「一錫龜山に入った」のであれば、堅操の示寂（明暦元年（一六五五））まで僅か五年の間しか堅操に侍していないことになり、前記の奠文の内容にそぐわぬ。元松、元策の系字からみても、江岳は始めから堅操の弟子であつたと思われる。

#### 四 江岳の晩年とその法系の末路

既に記してきたように江岳は、慶安三年（一六五〇）三江の示寂にあい、五年後の明暦元年には堅操の示寂にあう。翌明暦二年頃「笠山会要誌」を脱稿している。七年後の寛文三年（一六六三）秋、武州公（地藏院開基細川頼之の像を重ねて修造するための化縁の疏と序文を書き、同年冬十一月にはこの武州公の靈像の重刻が完成し、地藏院に安置している。翌寛文四年（一六六四）枯木堂（地藏院僧堂）が再造され、黄檗山の木庵が額と警策を贈っている。寛文十一年、朝鮮修文職に任ぜられ、対馬の以酊庵<sup>(1)</sup>に赴くことになるのであるが、江岳はそれに先立ち、以酊庵輪住中の寛文十三年正月五日に正当する地藏院開山碧潭周皎禪師の三百年の大遠諱を、天竜一山の僧衆を延慶庵に請して預修するのである。虎林和尚語録の左の如き香偈により、そのことが知られる。

当来癸丑（註・寛文十三年）正月初五日、乃是衣笠山地藏禪院開山勅諡宗鏡禪師碧潭大禪師三百年遠諱之辰也、的裔前臨川江岳西堂、今茲嚴奉「台命」、司朝鮮修好之文命、而不日將赴馬嶋、以故先申兩歲、寛文第拾一禩、竜輯辛亥、孟陬廿四冀、普請闔山衆縉於延慶禪庵、不設齋會、奉酬慈蔭之次、特俾山野修香供、嗟夫、今晨即地藏薩陀訖化之齋日也、為抒香偈云、

谷口拈蘭薰霽嵐、地藏化境活伽藍

閻浮十万八千日、宗鏡重輝印碧潭

しかし江岳は朝鮮修文職の任期半ばにして寛文十二年（一六七二）閏六月五日、対州以酊庵にて病没するのである。<sup>(2)</sup> その世寿を審にしない。江岳病没の四ヶ月後、諸弟相より一山の衆を請じて追悼の忌齋を設けている。虎林和尚語録に江岳西堂追輓の香偈を見てみよう。

今茲寛文第拾二、竜集王子閏六月五日之、吾山南芳主盟江岳西庵禅彦唱、滅於対州睹驢山以酊庵、故山友社、邈聞訃音、莫不盡焉、嗚呼禅彦不啻稔飽參之稱、況又膺修文之選、去歲奉台命、赴馬州、屢次製書、蓋敦朝鮮隣好之誼、瓜期未滿、華實欲易、胡為不保遐寿、靡任慨嘆、諸弟今日特請闔衆、不設忌齋之次、山野漫述一偈、聊充香供云、

一蘆輕泛海西灣 施化三韓客楊閑

果見南華通正脈 無端滅向睹驢山

孟冬十有一蓂 前天竜中虔輓

この追輓の偈によれば、江岳はその最晩には南方院の住名を帯びていたようである。江岳示寂の後、地藏院は十三世として絶岸元箴が嗣ぐが、江岳の法系はこれにて絶えることになる。その後は十四世古靈道充、十五世雲崖道岱十六世桂洲道倫と続く丹波常照皇寺無範派下の碩学の一統にとって替わられることになる。<sup>(3)</sup>

(1) 以酊庵については上村観光著「禅林文芸史譚」四九六頁「対州以酊庵の沿革」並に「禅文化」三九号、桜井景雄師論稿「対州修文職について」参照。

(2) 伊藤東愼師著「黄竜遺韻」附録の以酊庵住持籍では六月廿五日寂とする。

(3) 地藏院法系図。



└首座揚昌宣

└首座濟周弘

└臨川堅元松

└臨川江元策

└知藏絶岸元箴

└天竜古道充

└天竜雲道岱

└天竜桂洲道倫